

気道食道シヤント(Provox)使用者団体における嗅覚リハビリテーションの実態調査

石川 幸伸¹⁾、鈴木倫²⁾、柳有紀子³⁾、爲数 哲司¹⁾

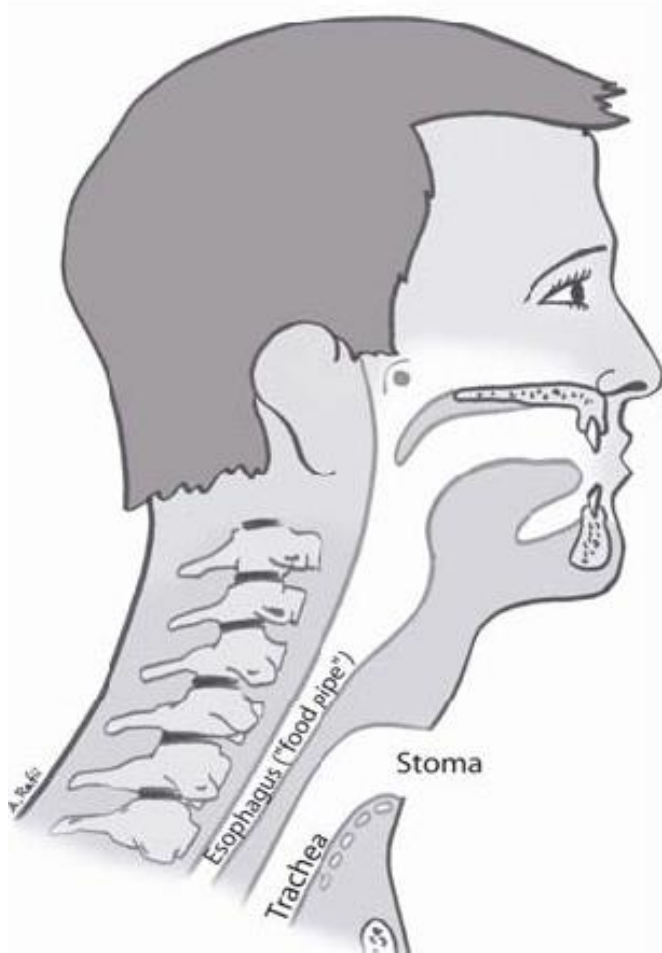
- 1) 国際医療福祉大学福岡保健医療学部言語聴覚学科
- 2) 国際医療福祉大学成田保健医療学部言語聴覚学科
- 3) 日本福祉教育専門学校言語聴覚学科

本研究に関する利益相反事項はありません。

背景

喉頭全摘出により出現する問題

- ・発声困難
- ・入浴トラブル
- ・息めない
- ・排便困難
- ・重いものが持てない
- ・**嗅覚の低下**



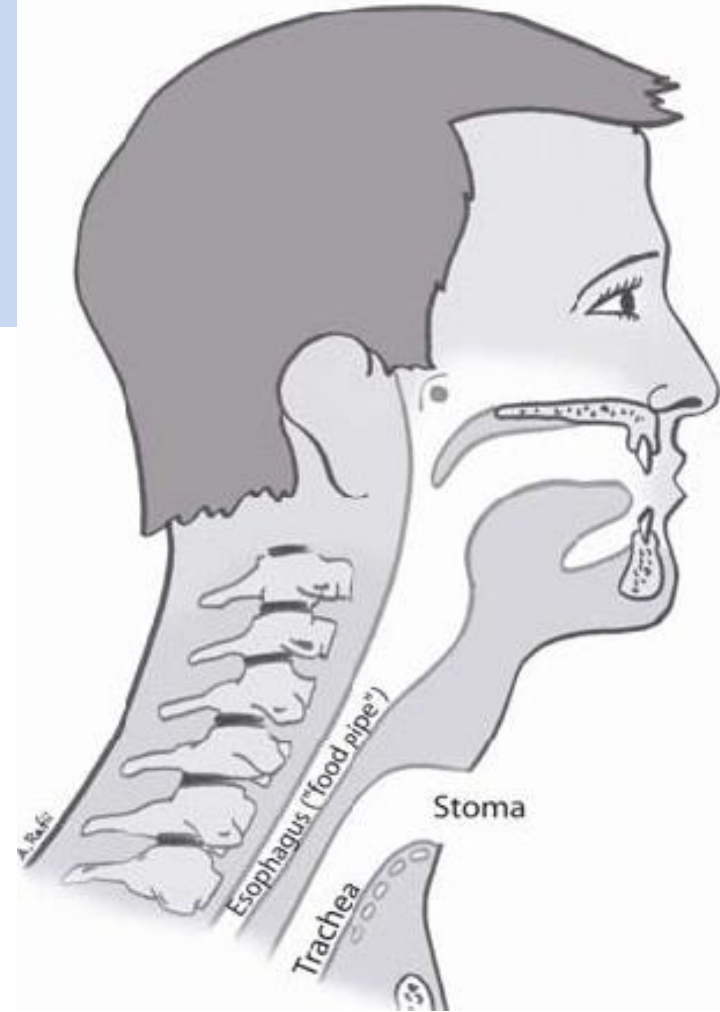
嗅覚の低下は喉頭全摘出患者の90%以上に認める
(坂口ら,1991、Mumovic et al, 2014、Morales-Puebla et al,2010)

背景

嗅覚は食品を味わう事、香料を楽しむ事、火事やガス漏れなど身の回りの危険を未然に防いで安全な環境を保証する上で重要



しかし、本邦において喉頭全摘出者に対して嗅覚リハビリテーションが行われている実態は報告されていない。



目的

本研究の目的は喉頭摘出者団体（認定NPO法人悠声会）の協力の下、嗅覚に関するアンケートおよび日常のにおいアンケートを用いて、喉頭全摘出患者の嗅覚に関する問題、嗅覚リハビリテーション（以下、嗅覚リハ）の実態を明らかにすることである。

方法

本研究のデザイン: アンケート調査による横断研究

アンケートは喉頭摘出者団体「認定NPO法人悠声会」の会員190名に対し、返信用封筒と共に送付。

アンケートの回収期間: 2016年1月28日から2016年3月31日とした。

アンケートの調査項目

1. 基本情報（年齢、性別、代替発声手段など）
2. 嗅覚リハビリテーションについて（①嗅覚リハを受けた経験の有無、②手術後何日目にリハビリを行ったかについて、③リハビリを受けた場所について（病院または患者会）、④自主トレーニングを含む継続したリハビリを実施しているかどうかについて
3. においに関する自由記載
4. 日常のにおいアンケート（69歳以下）

結果

- アンケート有効回答数: 105/190 男性93名 女性12名
- 平均年齢: 67.72歳 (SD7.73)
- 代替発声手段: 全例provox発声
- 嗅覚リハビリを受けた経験
 - 病院: 4.7%(5/105名)
 - 患者会: 24.7%(26/105名)
- 自主トレーニングを含む継続した嗅覚リハを行っている患者の割合: 11.4%(12/105名)

自由記載欄のコメント

リハビリテーションに関するコメント

嗅覚リハビリを受けられる場所を知りたい。

嗅覚が回復するならリハビリしたい。

においのリハビリがあることを知らなかった。

日常生活に関するコメント

食品が腐っていてもわかりづらい。

主婦にとってにおいがわからないのは普通に不便。

においはほとんど、わからない。ガス漏れが心配。

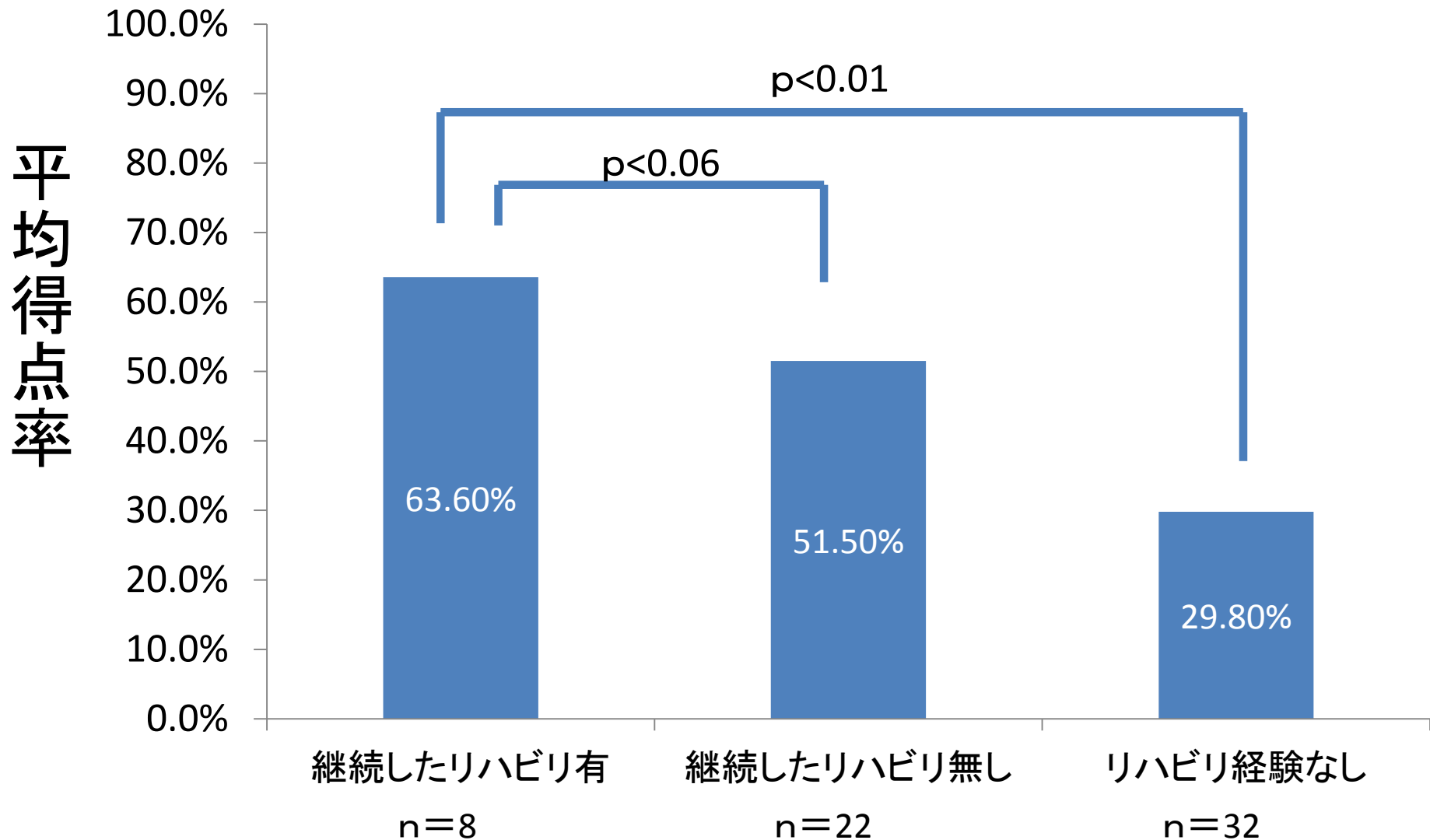
ガス漏れ、火事のにおいがわからないのが困る。

その他

全くにおいは感じないが困ってない。

においについてはあきらめている。

日常のにおいアンケート(69歳以下)



考察

嗅覚リハビリを受けた経験がある患者の割合：**4.7%**

患者の声

「**においのリハビリがあることを知らなかった。**」

「**においについてはあきらめている。**」

日常のにおいアンケートの結果より、**継続した嗅覚訓練は嗅覚を保つのに有用**であることを示した。

嗅覚リハを患者に対し提供してこなかった
我々が「患者自身に嗅覚についてあきらめさせている」

**嗅覚リハを提供できるよう積極的に患者と関わり、
「においは問題ない」という声を多数にしていく必要がある。**

結語

気道食道シャント(Provox)使用者に対し嗅覚リハに関するアンケートと日常のにおいアンケートを行い、嗅覚リハの実態について、下記の結果を得た。

1. 病院において嗅覚リハを受けた経験がある患者率は4.7%(5/105名)と少なかった。一方で自由コメント欄では嗅覚リハに関する強い要望を認めた。
2. 日常のにおいアンケートの結果、継続した嗅覚リハを行っている群は他の群に比べ平均得点率が高く、継続した嗅覚リハの有用性を認めた。
3. 結果より、嗅覚リハを提供できるように患者と積極的に関わり、患者の要望に応じていく必要があることを示した。